

A炉の失敗から目をそらし、B炉で試験再開するのは許されない 白金族対策で完全に行き詰まったアクティブ試験を中止せよ

9月10日、日本原燃は、六ヶ所再処理工場の竣工を2年延期し、2012年10月とすることを発表した。2年もの大幅な延期は、ガラス固化試験が行き詰まったまま、見通しが全く立たない状態にあることを如実に示した。

原燃は、8月23日に、ガラス固化試験に関する報告書「ガラス熔融炉運転方法の改善検討結果について（改正版）」を提出した。9月10日の社長記者会見では、同報告書の試験計画に基づいた今後のスケジュール（「今後の作業内容」）を明らかにした。

「今後の作業内容」では、2011年度内を目途に、①B炉の温度計追加設置工事、高レベル廃液濃縮缶対策、セル内機器点検、②B炉の事前確認試験（低模擬廃液、実廃液を使用）、③A炉の炉内残留物除去、④A炉の温度計追加設置工事等、セル内機器点検、⑤A炉の事前確認試験（低模擬廃液を使用）を行い、2012年10月までに、⑥B炉のガラス固化試験、⑦A炉のガラス固化試験、その後アクティブ試験報告書を提出し、竣工するとしている。

B炉での試験再開は現行試験計画に反している

原燃が出した試験計画は、行き詰まったA炉を後回しにしてB炉で試験を再開するというものである。しかし、この計画は、国から承認された現行試験計画に明確に反している。現行試験計画は、2008年6月11日付の原燃の報告書「安定運転条件報告」に示され、同報告書は同月30日の核燃料サイクル安全小委員会で承認されている。6月11日付報告書では、「はじめに①ガラス熔融炉（A系列）で『安定した運転状態の維持』及び『白金族元素の影響を考慮し、管理された運転状態の維持』について確認し、次に②ガラス熔融炉（B系列）でのガラス熔融炉運転性能確認試験及び処理能力確認試験を実施する」とされている。即ち、A炉の試験が上手く行くことが、B炉の試験を開始する条件なのである。

しかし、A炉の試験は、2008年10月、初めて不溶解残渣廃液を含む廃液を供給したところ、たちどころに白金族が堆積して運転が続けられなくなり、それ以来長期中断したままである。B炉の試験を開始する条件は全くない。

A炉が受けたとされる実廃液の影響とは何か具体的に示すべき

原燃は、B炉で試験を再開するまともな理由を何一つ示していない。8月23日付報告書で、「KMOCと実機の比較評価等をより確実に行うため、まず実廃液による影響を受けていないB系列で実施する」と示唆しているだけである。これを裏返せば、A炉が実廃液による影響を受けていることを認めたことになるが、その影響とは何なのか同報告書では全く示していない。

化学試験をいい加減に終了したことの責任

「事前確認試験」では、低模擬廃液を用いた化学試験レベルの試験が行われることになっている。化学試験はアクティブ試験の前のウラン試験の前段として、5年以上前に終了した試験である。化学試験が不十分なままアクティブ試験を行い、行き詰まったから化学試験に後戻りするということである。7月27日の原子力委員会会議において近藤委員長は、「化学試験が不十分だったから、この時点に立ち戻るということですね」と発言し、原燃もそれを認めている。

化学試験の結果が議題となった2005年7月の再処理WGの会議では委員から「個々の試験

結果の妥当性については事業者の責任」という意見が出ているが、いい加減な形で化学試験終了を認めた国の責任が問われなければならない。場当たりの試験を行うことは許されない。

A炉の炉内残留物の実態を分析しようとしな

原燃は、A炉の炉内残留物の分析を行おうとしていない。残留物の除去作業も、「今後の作業内容」ではずっと後の段階に追いやられている。残留物の除去と分析は、トラブルの原因を炉内の実態から探るために必要な作業である。しかし、原燃は、それなしに試験計画を出しており、今後の試験を行う方針である。保安院は、前回2007年末のトラブルで炉内ガラス全量抜き出しが行われた時は、残留物の分析等が実施された上で、運転方法の具体化を図ることを指示した。今回の残留物には不溶解残渣という前回には無い廃液成分が含まれているのであるから、改めて分析するというのが、前回の指示に沿った措置となるはずである。しかし、今回、保安院はそのような指示を出していない。トラブルにはまり込んだA炉の実態から目をそらし、ましな状態にあるB炉であたかも試験が進んでいるかのように見せかけようとしている。

流下性低下への対策は温度計の数を増やすことのみ

8月23日付報告書では、不溶解残渣廃液供給以降に流下性が低下したことへの対策を出しているが、実質的な対策はガラス温度計の追加設置に限られている。現行炉の本質的な技術的問題に立ち入るのを避けて、温度計の数を増やすという一時しのぎのやり方しか示せない同報告書は、むしろガラス固化の行き詰まりを如実に示している。

新型炉への更新まで時間稼ぎしても無駄

今回の延期で竣工は2012年10月となったが、一方で、現行炉は、現在開発中の新型炉に2012年度に更新される計画になっている。更新が計画通り行われるとすれば、現行炉での試験は、その間の時間稼ぎのようなものとなる。また、新型炉も現行炉と同じ方式のLFM法であり、白金族が堆積するという原理的欠陥を抱えたままのものである。新型炉に更新したとしても、現行炉と同様のトラブルに陥ることは必至である。

核燃料サイクル安全小委員会は8月23日付原燃報告書を承認するな

8月23日付報告書は、核燃料サイクル安全小委員会の下の再処理WGでまだ審議中の段階にある。しかし、原燃は、9月10日の社長記者会見では、同報告書が既に承認済みのものであるかのように、同報告書の線でのスケジュールを発表した。

保安院と再処理WGは、同報告書が自らの決定を否定するものでありながら、説明が不十分な点の追加報告を求めるだけで、原燃の計画変更に基づいて同調している。追加報告を提出させ、それを小委員会で承認する方向で進んでいる。9月30日には、保安院は炉への温度計の追加設置を認可した。温度計追加は、7月28日の変更認可申請書で原燃が出していたが、その全体計画での位置づけは8月23日付報告書で初めて示したものであり、本来同報告書が承認されて初めて許されるものである。原燃と保安院は一体となりB炉での試験再開を強行しようとしている。

10月5日の経産省へのガラス固化試験に関する要望・質問書提出と交渉に結集しよう

10月5日、全国からの賛同の意思をバックに経産省への要望・質問書提出と交渉が行われる。A炉の実態を具体的に示させ、現行炉の本質的欠陥をあぶり出していこう。A炉の実態を棚に上げた形での、何らのまともな理由もない計画変更、B炉での試験再開を阻止しよう。